

「大黒屋光太夫とラクスマントリニティ(3)

寛政5年（1793年）

6月3日、ラクスマント一行は砂原に向かうため厚岸を出航しました。

しかし、その後は濃霧のために両船は離れてしまい、松前藩船の禎祥丸は砂原に着きましたが、エカテリーナ号の姿は見えず、6月8日になって箱館湾に現れました。

箱館から松前へ

6月10日、幕府普請役で、根室においてラクスマントとともに越冬した田辺安蔵らは、箱館湾に投錨したエカテリーナ号に乗船し、ラクスマントは上陸し、商人白鳥新二郎の屋敷で沐浴し、饗應を受けて工カトリーナ号に戻りました。

6月17日にラクスマント一行11人と光太夫ら2人は箱館を出発しましたが、これに幕吏・藩吏・医師・包丁方・槍持など16

人、さらに駕籠かき・荷物持ち入足・馬丁（馬の口取り）・警護兵・従者などが続きました。ラクスマントの日記によれば、「総勢450名の長列」と記されています。

6月20日には荒谷峠を越え、大澤村に入り、藩吏の交替があり、ラクスマントらも服装を整えました。ラクスマントは8人かつぎの藩主用の駕籠に乗り、その前には駕籠に乗った光太夫、後ろには幕吏の乗った駕籠と続き、午後3時ごろには松前に入りました。

ラクスマントらロシア人宿舎として、蔵町の松前藩士吉田栄之丈宅を臨時施設として充てました。夕方6時になって幕吏がロシア人宿舎を訪れ、明21日に松前家浜屋敷（下国斎宮の邸）引き上げ、修繕して浜屋敷と云う）で日露会談を行う旨を告げました。その礼式の協議で、日本側は膝を折つ

て座る平状の札を要求ましたが、ラクスマントらは膝を折つて座ることは出来ないとして主張し、椅子に腰掛ける立式となりました。

第1回日露会談

6月21日に浜屋敷で行われ、その際「宣諭使」石川忠房・村上義礼は、ラクスマントに対し、まず藩吏に、ロシアから松前藩主に提出した文書の返却とその申渡書を差し出させました。申渡書は、「」の度の書簡は、横文字で我国の人は知らない所である。仮名文字に似てはいるけれどもその語は通じない所が多く、文字もわかりづらく、一つの失念も差し障りがあり、詳しい答えにならないので、全てお返しします」という内容でした。

そして、幕府からの贈り物として、大長刀三振の入った桐箱がロシア側に示されました。次に、異国人に通交や交易の拒絶を諭するための「国法書」（諭書）を読み上げました。

6月22日と23日は主に「国法書」の翻訳が行われ、24日に浜屋敷で第2回日露会談を行い、長崎への「信牌（入港許可書）」の交付の約束と、漂流民の受領が承諾されました。夕刻に3人の日本人役人がロシア人宿舎に赴き、光太夫と磯吉の2人を受け取り、翌日受領書がロシア人宿舎に届けられました。

6月27日の浜屋敷での第3回日露会談では、紙に書かれた「信牌」が手交され、ラクスマントはロシアに帰りました。

漂流民のその後

6月24日に松前で受領された光太夫らは、その後、江戸に送られることになり、8月17日に到着しました。江戸南町奉行所での取り調べの後、9月18日には江戸城中吹上御物見所で將軍・家斉の上覧となり、漂流話やロシア事情について聞かれました。

その後、報償として光太夫には30両、磯吉には20両が支給され、月々の御手宛として光太夫は3両、磯吉は2両渡され、江戸の番町薬園に留め置きとなり、ここで余生を過ごしました。

第2・3回日露会談

6月22日と23日は主に「国法書」の翻訳が行われ、24日に浜屋敷で第2回日露会談を行い、長崎への「信牌（入港許可書）」の交付の約束と、漂流民の受領が承諾されました。夕刻に3人の日本人役人がロシア人宿舎に赴き、光太夫と磯吉の2人を受け取り、翌日受領書がロシア人宿舎に届けられました。

6月27日の浜屋敷での第3回日露会談では、紙に書かれた「信牌」が手交され、ラクスマントはロシアに帰りました。